様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３４１６

研究課題名（和文）Expressivesの類型論的研究―「恣意性」を超えて

研究課題名（英文）Beyond Arbitariness: Typological research on expressives

研究代表者
Ｂａｄｅｎｏｃｈ　Ｎａｔｈａｎ（Badenoch, Nathan）

京都大学・国際戦略本部・特定准教授

研究者番号：５０５９９８８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、expressivesを対象として、音・文法・意味の関係性を調査したものである。アジアの３つの地域で、合計１８言語を調べ、母語話者の言語使用に基づいた分析をした。国内外の研究者が言語文化や地域を超える議論を行い、日本を中心とした研究ネットワークを構築した。また研究成果として、「ムンダ語の擬音語擬態語辞典」及び「南アジア言語地域におけるExpressives」（英文）を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本でいうオノマトペ、すなわち擬音語擬態語は、全世界で見られる言語現象であるにも関わらず、言語学においては今まで周辺的な位置付けであった。本研究では、音象徴を使って、相手に感覚や知覚を直接的かつ鮮明に伝えるこの類の単語を中心に据えて、文法、意味、会話を捉え直す試みを行った。日本では、オノマトペ研究が発展しており、擬音語擬態語辞典が古くからある一方、他の地域ではそのような知的資料は少ない。本研究では、日本で長い歴史を持つオノマトペ研究から得た多くの知見を基に、日本と海外を繋ぐ研究者ネットワークを通して欧米の主流議論と違った観点から論じることによって、近年注目を集めている本研究領域に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This research examined the diversity of expressives, also known as ideophones, in Asia. Expressives are found widely in the world's languages, but have been marginal to the study of language and linguistics. The research consisted of teams working in East Asia, South Asia and Southeast Asia, and focused on collecting and analyzing primary data from native speakers in their daily linguistic environment. The languages researched included major languages used in official capacity, as well as small, endangered languages. The project's theoretical contributions include meaning as networks of sensory perception, expressives as moral propositions, and advances in the understanding of sound symbolism in selected Asian languages. The project has produced a Dictionary of Mundari Expressives, including meaning, examples and comparative data in both English and Japanese. An edited volume of 14 chapters entitled "Expressives of the South Asian Linguistic Area" is under review for publication.

研究分野：地域研究

キーワード：expressives　ideophones　擬音語擬態語　音象徴　linguistic area　希少言語　東南アジア　南アジア

1 研究開始当初の背景

本研究は、アジアにおける expressives または ideophones と呼ばれる、日本語の擬態語・擬音語に相当するものを対象として、音・文法・意味の関わり合いを調べた。「恣意性」をめぐるソーシュールの議論を乗り越え、expressives とは音と意味が直結していると見られている。日本語の特有のものではなく、むしろアジア各地で広く分布する言語現象である。Expressives をめぐる研究は、近年、「オノマトペ」研究という名前で、マックス＝プランク心理言語学研究所や慶應義塾大学などでプロジェクトが立ち上がり、毎年 1 度はワークショップが開催されるなど、大きな盛り上がりを見せてきた。だがそのいっぽうで、語類としての定義の問題に終始する、個別言語内での記述に留まるなどの、以前から続く閉鎖的な研究状況はいまだに根強い。またこの最近の潮流は、もともと研究の蓄積があるアフリカの言語や日本語に対象が限定される傾向にあり、研究分野の類型論的進展は必ずしも加速していない。そこで、本研究では危機言語を含むアジアのさまざまな言語を対象に、各言語の専門家と母語話者、更に通言語的視点を持つ専門家の連携により、expressives 研究の本格的な類型論的展開を押し進める。また、expressives は、東南アジア・南アジア大陸部の、語族を越えた地域特徴とされる(Emeneau 1969; Williams 2014)。語族的特徴でないとすると、一体何が原因でこの語類が発達しているのかは、誰もが抱く疑問でありながら、「オノマトペ」研究全体でも今日まで説得力のある解答は出されていない（cf. Nuckolls 2004）。本プロジェクトでは、従来の研究に欠けていた地域類型論的アプローチを明確に打ち出すことによって、通時的変化や言語接触の様相の観察からこの問題に新たな光を当てる。

2 研究の目的

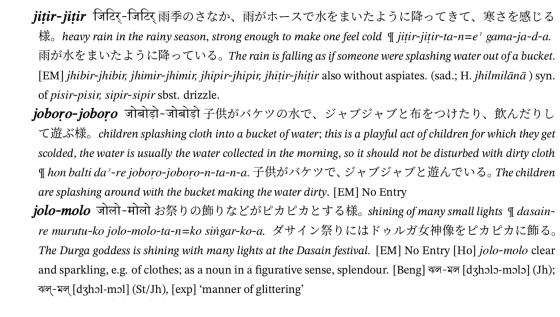
本家研究では、音象徴と意味が直接結びついた語彙・文法体系としての expressives の全体像を、東南アジア・南アジア・東アジアの歴史的・類型的に多様な言語の、音韻・形態・統語・意味・談話レベルにおける実証的な分析を通して、包括的・多面的に明らかにする。各言語の専門家、母語話者、expressives 研究の専門家の強固な連携により、自然会話における expressives の仕様のダイナミズムを観察する方法論を構築することに加え、expressives の類型論に理論的な枠組みを与えた。「周辺的」とするにはあまりにも膨大で体系的であるアジア言語の expressives を本格的に分析することにより、言語をシニフィエとシニフィアンの「恣意的」な関係に基づく記号体系と捉える欧米の近代言語学を超えた新たな言語間の創出を目指した。

3 研究の方法

東南アジア、東アジア、南アジア 3 地域の個別言語の専門家とその母語話者のチームが地域班を構成し、相互に連携して、担当言語の expressives の音韻・形態・統語・意味・談話レベルにおける網羅的なデータ収集とその分析を進めた。また、左の図のように、地域班毎に、語族をまたがる共通特徴についても検討し、地域類型論的アプローチにより、通時的変化や言語接触の様相の観察からこの問題に新たな光を当てた。
調査に際しては、特に自然会話における expressives の使用に着目し、詳細な記録・記述を行う。各理論班は、各地域班の研究成果を比較・検討しながら、expressives の調査方法論と、その類型論に関する理論的な枠組みを構築する試みを行った。このアプローチにより、言語間の共通点と相違点を深く広く観察することで、言語・語族を越えて適用可能な理論的・方法論的枠組みの構築を目指した。特に、expressives は、従来の文法理論を前提とした言語調査では必ずしも十分には得られない言語要素であり（実際、多くの文法書がこの語類の記述を欠いている）、とりわけ自然会話の収集法の確立が鍵となった。

4 研究の成果

本研究は、3年間の実施を経て、東アジア班と東南アジア班と南アジア班で個々の研究を進めながら、地域を跨いだ情報共有、意見交換、そして比較考察を行ってきた。分担者と国内外の協力研究者が3回に渡ってワークショップで成果を発表し、多様なデータに基づいて理論や方法論をめぐる議論もした。その中で、特筆する成果は5つの代表的な課題として選別してあげる。


jiṭir-jiṭir 142 *julu-jupu*

jiṭir-jiṭir জিটির্-জিটির্ 雨季のさなか、雨がホースで水をまいたように降ってきて、寒さを感じる様。*heavy rain in the rainy season, strong enough to make one feel cold* ¶ *jiṭir-jiṭir-ta-n=e' gama-ja-d-a.* 雨が水をまいたように降っている。*The rain is falling as if someone were splashing water out of a bucket.* [EM] *jhibir-jhibir, jhimir-jhimir, jhipir-jhipir, jhiṭir-jhiṭir* also without aspiates. (sad.; H. *jhilmilānā*) syn. of *pisir-pisir, sipir-sipir* sbst. drizzle.

joboṛo-joboṛo জোবোড়ো-জোবোড়ো 子供がバケツの水で、ジャブジャブと布をつけたり、飲んだりして遊ぶ様。*children splashing cloth into a bucket of water; this is a playful act of children for which they get scolded, the water is usually the water collected in the morning, so it should not be disturbed with dirty cloth* ¶ *hon balti da'-re joboṛo-joboṛo-n-ta-n-a.* 子供がバケツで、ジャブジャブと遊んでいる。*The children are splashing around with the bucket making the water dirty.* [EM] No Entry

jolo-molo জোলো-মোলো お祭りの飾りなどがピカピカとする様。*shining of many small lights* ¶ *dasain-re murutu-ko jolo-molo-ta-n=ko siṅgar-ko-a.* ダサイン祭りにはドゥルガ女神像をピカピカに飾る。*The Durga goddess is shining with many lights at the Dasain festival.* [EM] No Entry [Ho] *jolo-molo* clear and sparkling, e.g. of clothes; as a noun in a figurative sense, splendour. [Beng] ঝল-মল [dʒʰɔlɔ-mɔlɔ] (Jh); ঝল্-মল্ [dʒʰɔl-mɔl] (St/Jh), [exp] 'manner of glittering'

『ムンダ語擬態語擬音語辞典』: 今回の科研の主要な成果である『ムンダ語擬態語擬音語辞典』は、ムンダ語の Expressive を見出し語とし、日本語と英語で意味を記述し、ムンダ語の例文、例文の和訳と英訳、それに隣接する

サンタル語、ホー語、クルフ語、大西の全面的協力によるベンガル語等々の類似語形と意味を掲載している。今回1500語程を辞書項目として記述しているが、どんなに少なく見積もっても、このうちの500語ぐらいはムンダ語使用者ならば誰でも知っている語彙であろう。

*Expressives of the South Asian Linguistics Area:*本研究の重大な成果であるこの原稿は、英語による共著論集である。12の言語を扱う章は、言語学・人類学・文学評論などを跨ぐ包括的・多面的な expressives 研究の可能性を示す。14 章からなるこの原稿は、Brill Publishing には 2019 年 2 月に提出し、現在は査読中である。昨年、最初に提出した出版社先と連絡不調が生じたため、別な出版社に提出せざるを得なくなり、査読過程が少々遅れている状況にある。 目次の各セクションの特徴をここで紹介する。なお、本研究の代表者および分担者は下線で記す。パート1は、音韻論・意味論・形態論を取り上げた文法の話である。下で簡単に紹介するベンガル語の音議論とムンダ語の意味論に関する分析以外にも、ムンダ語の重複と母音子音交代とタミル語の詩に関する通時的な分析もある。この4本の論文は、今までの expressives 研究の主流により近いものである。パート 2 は、人類学的な分析を行った performance から考察した expressives である。文学、詩、歌で見られる、話者の演じる expressives に焦点を当てる。grammar と poetics が交差するところで見る expressives が、言語文化の諸問題を浮き彫りにする。長い歴史を持つベンガル語の文学、流行の激しいヒンディ語ポップス、そして文字を使って少数民族アイデンティティを主張する expressives を取り上げながら、研究の最先端に貢献する。パート 3 は、少数派である民族語を中心に、expressives における多様性を紹介する。

倫理的命題としての expressives： Expressives は、話者が観察した現象に対する知覚を、音と意味が直結している語で鮮明に、「描く」語という風に今、理解されることが普通である。ありのままに描写するのが expressives の特徴であると考えられてきた。しかし、本研究では、話者の感情や思い込みも入り、社会的な価値観、理想的な性格・行為などに関して「言及する」働きもあることがわかった。話者コミュニティが共通とする社会規範など、すなわち文化が、 expressives を使うことによって再生されるとも考えられる。*Indian Linguistics* で発表した論文 Expressives as Moral Propositions in Mundari が、正しい生活様式、道に迷う人、髪型、集団作業と創造の共同体という3つのテーマを取り上げた。その例を2つ簡単に説明する。

「沈黙」の音象徴： ラオス北部で話されているオーストロアジア語族に属するビット語には、沈黙、不在、 停止を表す擬態語は数多くある。言語学においては、今まで沈黙という現象を扱う議論は、話を発さない言語行為を注目してきた。しかし、「無」を音で描くというのはビット語では普通である。これは、無という状況のみならず、それに対する話者の心境も含み、その体験を通じて声を与えることによって、聞き手の想像力を導いて多層からなる知覚を伝える。Association of American Anthropologists の2017年度総会で、本研究の関係者が開催した expressives に関するパネルで発表した。本研究で明らかにしたビット語の音象徴体系や expressive 派生テンプレートを中心にした文法本と、1500語を超える Lexicon of Bit Expressives を単行本で出す予定をしている。

expressives を中心にした東南アジア言語地域： 本研究で、ビット語以外に、ラオスで話されているクシンムール語、ポンラーン語およびミャンマーのサームロン語とルマーイ語を調査した。このデータと分析が、東南アジアの expressives から見た言語地域論を目指す第一歩となった。南アジアでは、形も音も義に似ている事が多いが、東南アジアはそうではない。敢えて言えば、オーストロアジア系とタイ系で共通の特徴はある程度ある。南アジアのこと地域現象を説明するには、言語接触が非常に重要な要因であり、同様にオーストロアジア系とタイ系の間に接触の歴史が長いので、expressives にその影響も見られてもおかしくない。本研究は、オーストロアジアの言語を中心に、東南アジア言語地域を expressives という観点から新たな考察を試みる第一歩を踏み出した。特に力を入れてきたラオスでの研究は、ラオス国立大学の文学部の教授と共同で行なった。公式に認定されている民族の数は49であるが、辞書ももちろんのこと、文字も持たない口頭文化によって継承される言語が圧倒的な過半数をしめる。しかし、文学部の元が部長は関心を持ち、本研究が実施される期間中に、代表者と緊密に連携しながら「ラオス言語研究所」が設立され、ラオスの国語とその方言以外にも、民族語の調査が研究所の重大なミッションに入っている。expressives 研究も、優先順位の高いテーマとされている。

5 主な発表論文等

［雑誌論文］（計 16 件）

1. Badenoch, Nathan, Nishaant Choksi and Madhu Purti, Expressives as Moral Propositions in Mundari, Indian Linguistics, 査読有り、in press.

2. Badenoch, Nathan, Sida Fauna Lexicon: Transparency, Expressiveness and Intimacy in Animal Names, in Hayashi Norihiko (ed) *Topics in Middle Mekong Linguistics*, Kobe City University of Foreign Studies, 査読無し, forthcoming.
3. Badenoch, Nathan, Nishaant Chokshi, Madhu Purti and Toshiki Osada, Performance In Elicitation: Methodological Considerations In The Study Of Mundari Expressives, in Shailendra Mohan (ed) Advances in Munda Linguistics, New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 査読無し、151-161, forthcoming
4. Osada Toshiki, Madhu Purti and Nathan Badenoch, The Dictionary of Mundari Expressives: A Non-Referential View on the South Asian Linguistic Area, Proceedings of 40th International Conference of the Linguistic Society of India, CIIL: Mysore, 査読無し、forthcoming
5. Badenoch, Nathan, Translating the State: Ethnic Language Radio in the Lao PDR, Journal of Contemporary Asia, 査読有り, 48(5), 2018, 783-807 https://doi.org/10.1080/00472336.2018.1462888
6. 千田俊太郎、金善美、朝鮮語 keshita 文:実演定時機能を中心に、ありあけ 熊本大学言語学論集、査読無し、18巻、2018、1−25
7. 長田俊樹、沙羅双樹考、水門―言葉と歴史、査読無し、28巻、2018、114−135
8. 金善美、指示詞を日韓対照言語学から照らす一現場指示の象徴的用法を中心に、韓国語教育論講座、査読無し、2018、113−137
9. Badenoch, Nathan and Norihiko Hayashi, Phonological Sketch of the Sida Language of Luang Namtha, Lao PDR, Journal of the Society of Southeast Asian Linguistics, 査読有り,10(1), 2017, 1-15 http://hdl.handle.net/10525/52394
10. Badenoch, Nathan, Bit Pronouns in a Northern Mon-Khmer Perspective, Annals of Foreign Studies, 査読無し, 92, 5,23
11. 稲垣和也、インドネシアのオノマトペ、 言語と文化 Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Japang, 査読無し、23、2017、43−63
12. 児玉望、東北地方の二つの方言の音律分析、ありあけ 熊本大学言語学論集、査読無し、17巻、2017、27−52
13. 児玉望、鹿児島方言の短い長母音、ありあけ 熊本大学言語学論集、査読無し、17巻、2017、53−70
14. 千田俊太郎、ウェブと語彙集:朝鮮語済州方言語彙研究の課題と展望、ありあけ 熊本大学言語学論集、査読無し、16巻、2017、35−46
15. Badenoch, Nathan, A Tale of Two Dictionaries: Discovering, Describing and Deliberating Diversity, IIAS Newsletter, 査読無し, 75, 2016, 40-41
16. 児玉望、アクセント核はどこから来たか、ありあけ 熊本大学言語学論集、査読無し、16巻、2017、1−34

［図書］（計 2 件）

1. 長田俊樹、マドゥープルティー、ネイサンバデノック、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、ムンダご擬音語擬態語辞典、2019、296
2. Osada, Toshiki and Masayuki Onishi, Manohar Publishing, Language Atlas of South Asia, 2017, 164

(Badenoch, Nathan and Nishaant Choksi (eds), Expressives of the South Indian Linguistic Area, submitted to Brill Publishers 査読中)

［学会発表］（計 34 件）

1. 長田俊樹、ニコラス・エヴァンズ教授の業績とその人となり、京都公開シンポジウム「島嶼地域における言語学研究の可能性と課題、2019
2. 長田俊樹、なせ日本語系統論は流行らなかったのか、国立国語研究所第104回コロキアム、2019
3. Badenoch, Nathan, Survey of Northern Mon-Khmer Expressives, Expressives Kaken Final Partner's Meeting, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2019
4. Masayuki Onishi and Burga Pada Datta, Constructing a Lexicon of Bangla Expressives, Expressives Kaken Final Partner's Meeting, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2019
5. Badenoch, Nathan, Expressives as Moral Propositions, Expressives Kaken Final Partner's Meeting, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2019

6. Osada Toshiki and Nathan Badenoch, Dictionary of Mundari Expressives: Building a Comparative Lexicon, Expressives Kaken Final Partners Meeting, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2019.
7. Badenoch, Nathan, Researching the Ksing Mul Language, First Conference of the Center for Research in Lao Languages and Linguistics, National University of Laos、Lao PDR, 国際学会、招待講演, 2018
8. Badenoch, Nathan, Word Formation in the Sida Fauna Lexicon, First Meeting of the Language and Linguistics of the Middle Mekong, Kobe City University of Foreign Studies, Kobe, Japan, 2018
9. Badenoch, Nathan, Toshiki Osada and Madhu Purti, The Dictionary of Mundari Expressives: A Non-Referential View on the South Asian Linguistic Area, 40th International Conference of the Linguistic Society of India, 国際学会, Central Institute of Indian Linguistics, Mysore, India, 2018
10. Badenoch, Nathan, Nishaant Choksi and Madhu Purti, Expressives as Moral Propositions, 40th International Conference of the Linguistic Society of India, 国際学会, Central Institute of Indian Linguistics, Mysore, India, 2018
11. 稲垣和也、方言から言語記述を模索する:ドホイ語の音韻論を事例として、東京大学言語学懇話会第106回例会、2018
12. 稲垣和也、(非)オーストロネシア諸語の辞書作り、AA 研フォーラム:言語研修(メエ語)文化講演、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2018
13. Kazuya Inagaki, Word Prominence in Pontianak Malay, 5th Meeting, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2018
14. 長田俊樹、地球研インダスプロジェクトを振り返って、東京外国語大学 AA 研フィールドサイエンス研究企画センター2018 年度1回コロキアム、2018
15. Badenoch, Nathan, Bit Morphology: Productive processes and Transparent Fossils, Languages and Linguistics of the Middle Mekong, Kobe City University of Foreign Languages, 2018
16. Badenoch, Nathan, Silence, Cessation and Stasis: Animating "Silence" in Bit Expressives, Annual Conference of the American Anthropology Association 国際学会, Washington DC, 2017
17. Badenoch, Nathan, Expressives as Language Play, Hampshire College Cognitive Sciences, 招待講演, Hampshire College, Massachusetts, 2017
18. Badenoch, Nathan, The Bit-Khang Complex, International Seminar on Mon-Khmer Linguistics, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2017
19. Inagaki, Kazuya, Austronesian Languages and Mainland Southeast Asia, Study on Origin and Migration of the 'Austric' Peoples: Mainly on Mainland and Inland Southeast Asia, 2017
20. Inagaki, Kazuya, Sound Symbolism in Indonesian Ideophones, Research on Expressives in Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2017
21. Onishi Masayuki and Durga Pada Datta, Sound Symbolism in Bangla Expressives, Research on Expressives in Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2017
22. Tida Syuntaro, A Stratal OT Approach to Korean Phonology with Special Focus on Vowel Epenthesis in Verbal Paradigm, Linguistics and Asian Languages, 招待講演, 2017
23. Tida Syuntaro and Kim Sunmi, Mimetics in the Jeju Dialect of Korean, Research on Expressives in Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2017
24. 稲垣和也、インドネシア語における母音交替重複オノマトペの記述的研究、第48回日本インドネシア学会、2017
25. 稲垣和也、インドネシア語オノマトペ研究序説、日本インドネシア学会、愛知県立大学、2016
26. Badenoch, Nathan, Bit Expressives, Payap university Linguistics Colloquium, Payap Univerisity 招待講演、2017
27. 金善美、韓国語の数詞句―日本語表現との対象から、言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第4回公開発表会、2017
28. Osada, Toshiki, Expressives in Mundari, Research on Expressives in Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2017
29. Badenoch, Nathan, Multiethnic Villages along R3 in Northern Laos, Payap University Linguistics Colloquium, Payap University 招待講演、2017
30. Badenoch, Nathan and Nishaant Choksi, New Issues in the Study of Munda Expressives, International Seminar on Munda Linguistics 招待講演、Deccan College, Pune, India, 2017
31. Osada, Toshiki, Research on Expressives - The Case of Mundari, International Seminar on Munda Linguistics 招待講演、Deccan College, Pune, India, 2017

32. 大西正幸、文学を通して見えるベンガル人のモンスーン観―タゴールの雨季の歌とタラションコル・ボンドバッダエの小説を例に、第132回地球研セミナー「モンスーン・アジアにおける人と自然」、総合地球環境研究所、2016
33. Badenoch, Nathan and Bualy Paphaphan, The Sociolinguistics of the Rubber Economy, International Conference on Lao Studies, 招待講演、Thammasart University, Bangkok, 2016
34. Badenoch, Nathan, Expressing Human Diversity: Dynamic Multilingualism in ASEAN, Kyoto-ASEAN Forum 2016, 招待講演, Kuala Lumpur, Malaysia, 2016

6 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:大西正幸
ローマ字氏名:Onishi Masayuki
所属研究機関名:同志社大学
部局名:国際学部
職名:研究員
研究者番号:10299711

研究分担者氏名:長田俊樹
ローマ字氏名:Osada Toshiki
所属研究機関名:総合地球環境学研究所
部局名:研究部
職名:名誉教授
研究者番号:50260055

研究分担者氏名:稲垣和也
ローマ字氏名:Inagaki Kazuya
所属研究機関名:南山大学
部局名:外国語学部
職名:准教授
研究者番号:50559648

研究分担者氏名:千田俊太郎
ローマ字氏名:Tida Syuntarou
所属研究機関名:京都大学
部局名:文学部
職名:准教授
研究者番号:90464213

研究分担者氏名:児玉望
ローマ字氏名:Kodama Nozomu
所属研究機関名:熊本大学
部局名:文学部
職名:教授
研究者番号:60225456

研究分担者氏名:金善美
ローマ字氏名:Kim Sunmi
所属研究機関名:天理大学
部局名:研究開発推進機構
職名:教授
研究者番号:20411069

(2)研究協力者

研究分担者氏名:秋田喜美
ローマ字氏名:Akita Kimi

研究分担者氏名:林範彦
ローマ字氏名:Hayashi Norihiko

※研究費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。